

## 社長自らワーケーション！



## あすへの話題

上田研究室の修士課程修了生と久々に会った。通信系の巨大企業子会社の社長を務めているという。教え子からとうとう社長が出たかと思えば感慨にふけったが、働き方を聞いて驚いた。なんと1年の3分の1以上を、北海道から沖縄まで、全国各地のゲストハウスを泊まり歩いているという。

「ワーケーションっていうんですよ。ワークとバケーション。もちろん仕事時間はむちゃくちゃ働いてます。会議も多いから、安い宿でも強いウェブ環境は必須ですね。でもちよっと時間ができると、見知らぬ土地を散策できるし、地元の方々と交流できるし、美味しいものも食べられる。東京ではそうはいかないじゃないですか」

費用は自費なのだという。格安航空は成田空港発なので、東京から成田に引っ越してしまった。「家は広く、家賃は安くなりました。空港まで自転車で行って、飛行機に飛び乗る。向こうでも身体を動かすから、人間ドックの数値も劇的に改善しました」

社長自らワーケーション、それは社員のためでもある。「大企業に勤めてきて、仕事が生生活の場に侵入してくることに、いつも違和感を覚えてきました。仕事はすごく優秀なんだけど、『夜通しゲームをやりたい。そこは譲れない』っていう若者もいるんですよ。なので『生活』の部分は自由にしたい。そう宣言して、社長自ら実践を実践したら、素晴らしい才能がどんどん集まってくるようになりました」

東京・渋谷で熱く語り合い、きょうも西表島から帰ってきた彼は、公園通り近くの1泊3000円というホステルへと軽やかに消えていった。



## あすへの話題

このごろの若者は傍若無人だ……なんて言っていた時代ははるか昔だ。電車の中とかでキレて怒鳴っているのは、きまって老人たちだ。若者はほんとおとなしくなった。そしてどう見られるかを異常に気にする。だから「他人の目なんか気にせず、自分のやりたいことをのびのびやろう！」とぼくはいつも講演で呼びかけるのだが、講演後にひとりの若者が近づいてきた。

社会人1年生という彼は「他人の目を気にするなんて言葉は初めて聞きました」という。おいおいそんなことないだろうと言いかけたが、彼の目は真剣だ。そして「これのせいです」とスマホを取り出す。

「中学生になってスマホを持つようになったら、学校から帰った後も同級生たちがうわさ話してるんです。あいつうぜーとか、きもいな……とか。そしたら自分も何を言われてるんだろうって怖くなってしまっただけ。それからずっと空気を読んで生きてきた気がします」

ぼくたちが中学生の頃は、学校から帰ればひとりになれた。今の中学生は帰宅しても同級生とつながっている。便利なことも多いだろう。でも多感な10代に、24時間友達とつながりあっていることは、実はキツイことでもある。つながりを切ってしまうば、仲間はずれだ。だから切れない。いつも他人の目が気になる……。彼のこれまでの人生を思っ、心が痛くなった。

でも講演者に声をかけるといふのは思い切ってるよ。これまでの自分から一歩踏み出してると思わない？ もう今日から世界が変わっていくよ。そう言つと、彼はちょっとシャイに微笑んだ。

## 他人の目



## あすへの話題

オーケストラの定期会員になったのは高1の時だから、もう50年近く前のことになる。東京都交響楽団という若いオケで、学席が安いのがありがたかった。以来ずっと聴き続け、オケも成長して日本を代表する団体となった。昨年末、紅白歌合戦でのすぎやまこういちさん追悼の「ドラクエ」はまさに入魂の演奏だった。

ところがコロナ禍で、他のオケに比べてお客さんの入りが極端に悪い。定期会員制をやめて、全て1回券にしてしまったからだ。コンサートの中止、指揮者交代、曲目変更もさらだから、極めて良心的な対応だ。しかしオーケストラにとって定期会員がどんなに大切か思い知らされた。

定期会員は全てのコンサートを聴く。だから好みの作曲家や指揮者だけを聴ける1回券のほうがいいように見える。でも定期会員になっていなければ、ぼくはこんなクラシック音楽好きにはなっていなかった。

当時家にあった中古の「世界音楽全集」にはマーラーもブルックナーもショスタコーヴィチも入ってなかった。ベートーヴェンの交響曲は運命と田園だけだ。だから毎回のコンサートは未知の曲との出会いの連続で、ほんとうにワクワクした。好きな曲、苦手な曲、どんな演奏が自分の好みなのか、それはたくさん聴かないと分からない。

好きなことだけを選べる人生が幸せだという人がいる。でも「好き」はそれまでの人生経験での「好き」だから、それだけでは世界が広がらない。若者は特にそうだし、人生100年時代の年長者だって、未知の世界にどれだけ次なる「好き」が隠されているか。人生も定期会員になりましょう。

## 定期会員



## あすへの話題

東京工業大という理工系大学に勤めて26年、授業や大学院での学生指導に加えて、大学1年～4年生を対象のゼミをずっと続けてきた。ゼミ生ひとりひとりが興味を持ったテーマを深く掘り下げて発表し、全員で話し合う。半年で2回ずつ、もう1000回以上の発表を聞いてきたことになる。学問論、貧困、差別、映画、音楽、旅、進路、人生の悩み、ライフスタイル、恋愛……多種多様なテーマは時代を映す鏡だ。

このところ増えてきたのがジェンダー関係だ。今年度後期のゼミでも既に2回の発表があった。ひとりの女子学生は自分がアロマンティックだという。誰にも恋愛感情を抱かない。これまでの経験の中から、たくさん傷つきもし、勉強を重ね、深い自己洞察もしての結論だという。

発表で「LGBTQとかSOGIについて基礎からまず説明するね」と言ったところ、ゼミ生たちから「もう知ってるから、そこは省略していいよ」と答えが返ってきたのには驚かされた。LGBTQ（性的少数者）や、SOGIすなわちどんな性に恋愛感情を抱くのかという「性的指向」、自分をどの性別と認識するか「性自認」などの話は、皆常識として身につけている。10年くらい前の学生たちとは全然違う！

彼女の目下の真剣な悩みは、知識もセンスもない「凡庸な」父親にいつどのよう知らせるかということ。ゼミ生たちからも「ぼくの、私の父親も全然ダメそう……」と一気に声が挙がる。教員もだ。そろそろうちの学生にもジェンダー教育が必要ですねあ、などと呑気なことを言いながら、とつづくの昔にすっかり追い抜かれている。



## あすへの話題

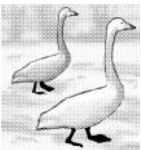
クルマでいちばん重要なパーツはどこだろう？ エンジン：もっともだ。ハンドル：もちろん！ ただぼくには盲点のパーツがあった。タイヤだ！

高速道路で急に車体がガタガタ揺れだした。工事：のわけないよね。サスペンションの故障か？ 怖いので高速を降りて、レッカー車で整備工場に運んだ。「そのまま乗ってたらタイヤが破裂して死んでたかもですよ」。タイヤの中央がぼっこり隆起している。あまりキロ数を走ってないので慢心していた。距離でなく年数で劣化するのだという。クルマはタイヤと地面が接している小さな面の摩擦で動いている。どんなにエンジンが優秀でも、ハンドルのキレが良くても、接地面がなければ走れない。当たり前前のことを今さらのように実感した。

そのときふと若き日のことを思い出した。20代のぼくは空回りばかりしていた。あれは世界への「接地」が悪かったのだと思う。エンジンを強力にしなければ、ハンドルのキレを良くしなければと、上物のスベックだけを考え、肝心のタイヤのことなんか忘れていた。だからよくスリップした、空回りした。ブレーキをかけても止まってくれない、ここぞというときに発進できない。タイヤだけあってエンジンがないのも大問題だが、その逆もしかり。

地面と仲良くしなければ走れない。でも自分を支えてくれる地面のことなんて何も考えてなかった。敬意も感謝もなかった。ひとりよがりだ、いつも欲求不満だった。そうか、ぼくは既に何度も事故ってたのだ。それなりのタイヤで地面と仲良くなれたのは、ごく最近のことなのかもしれない。

## タイヤ



## あすへの話題

ある一瞬すれ違ったただけなのに、その後の人生で何回も何回も思い出す人がいる。

20代の大学院生のぼくがスリランカで悪魔被いのフィールドワークをしていた頃、町の大衆定食屋に日本人とおぼしきおじいさんがいた。どうしてこんなところに？

植林ですよ。会社員やってきて、定年後は苦勞かけてきた妻と悠々自適の人生と思ってたんだけど、嫁さんがすごく不機嫌。なんであんな毎日家にいるんだって。いやあ、ショックですよ。オレ、邪魔者なんだって……。そしたらね、海外シルバーボラントニアで「スリランカの植林」っていうの見つけて、庭いじりが好きだからできるんじゃないかと。それで応募したら通っちゃった。

でもね、知らない国の田舎の村で植林。最初はひとりではげ山に苗木を植えてた。孤独な作業。そしたら若者たちが声かけてきて。じいちゃん何やってるんだ？って。じゃあオレたちも手伝うよってね。いやあ感動しましたよ。でね、任期が終わって帰るときに、「で、じいちゃん、次はいつ戻って来るんだ？」って。そう言われたら、帰ってこざるをえないよね。高校の同窓会とかで講演して、「あなたの浄財でこの山が緑になるんだ……」とか言つと、けっこうお金集まって、それで苗木買ってスリランカに來ると、若者たちがよう帰ってきたなって、また大歓迎してくれてね。

ぼくが生きられるのはあと10年くらいかもしれないけど、夢があるんだよ。次はあの山に植林して緑にしたい、その次は……ってね。君は若いけど、夢はあるかい？

何回も何回も、思い出す。

## 植林



## あすへの話題

制服の高校生と親が大学のキャンパス内を歩いている。その風景が目立つようになれば、入試が近い兆しだ。入試前日には何組もの親子が入れ代わり立ち代わり下見に訪れる。試験会場の校舎を事前に見ておく  
と落ち着くのだと思う。

「なんで親子連れで？」と、ある年代以上の人たちは思うはずだ。池上彰氏が10年前に東京工業大に着任したときも、入学式の親子連れの群れに驚き、憤っていた。そう、大学の入学式に親子同伴なんて、昔はあり得ないくらい恥ずかしいことだった。

いつ頃から親子連れになったのかはもう思い出せない。正門の「入学式」の看板の前は記念撮影の親子で長蛇の列となり、時計台前の撮影スポットもあふれて、いつしか左側と右側の2カ所になった。大学生が親の隣でニッコリ記念撮影！という図を、池上さんのように気持ち悪いと思うか、微笑ましいと思うか。しかし、自分が若い頃は気持ち悪かったけれど、親になったら子どもに付き添ってるといふ「転向」世代が確実にいるわけだ。

そんな中で、びっくりさせられたことがあった。入試前日、ブレザーの制服の男子高校生が正門脇の構内案内図をスマホで撮影していた。ひとりで下見は珍しいなと思  
って見ていたら、彼は立ち去り際、正門の中心に立ち、校内に向けて深々と頭を下げた。

その姿に驚き、感動した。そんな思いを持って目指してくれている大学なのだ。「頑張  
って」と声をかけようとして、こんな邪念の塊が話しかけてはいけないと踏みとど  
まった。そんな一言はいらない。彼の心は  
門の中の未来に一直線に向かっている。

## 入試



## あすへの話題

コロナでぼくのライフスタイルはどう変わったのだろうか。いろいろ考えていて、この2年間消費量が激減した食べ物があることに気づいた。

シュウマイだ！

コロナ前は大阪やら京都やら名古屋やら、やたら新幹線に乗っていた。月に数回ということもざらだった。新横浜で新幹線に乗るときの「儀式」、それは崎陽軒の「シュウマイ」を買うこと。そして車内でちびちびと食べる。お酒でもないのにちびちびは妙だが、高速移動しながら、原稿を書いたりメールの返事をしたりしつつ、ちびちび食べる。シュウマイ同士がちよっとくっついてるのもオツで、それを幅広の楊子ようじで引きはがしながら、熱海の海、富士山、静岡の茶畑、浜名湖と車窓は移り変わりながら、ちびちび食べる。シュウマイなしの東海道新幹線なんて考えられない。

それが新幹線に乗らなくなってしまった。講演も研究会も中止になりリモートになり。そしてシュウマイを食べなくなった。崎陽軒率は全シュウマイの5割を超えていたはずだから、このままだと人生で食べるシュウマイの数が激減してしまいそうだ。

ルーツは幼稚園か小学生の頃、大磯の大叔父の家に遊びに行く時、祖母が必ず横浜でシュウマイを買ってくれたことだ。子どもものぼくにはごちそうだった。電車にシュウマイという組み合わせはよくよく考えると妙だけど、ぼくの中では三つ子の魂百までで、深く条件付けされてしまっている。

その「風習」が途絶えてしまうのはあまりに悲しい。シュウマイが復活するとき、それがぼくのポストコロナだ。

## シュウマイ





## あすへの話題

オペラのカーテンコール、新国立劇場の舞台中央で指揮者が涙を拭っていた。

「椿姫」は華から死へと向かっていく。第1幕の冒頭があ有名な「乾杯の歌」。社交界の華、高級娼婦ヴィオレッタは結核で余命わずか。快樂こそが薬と歌うが、青年貴族アルフレードの告白に、初めて純粋な愛に目覚める。が、郊外で幸せに暮らす2人の館を訪ねてきた恋人の父。娘の結婚の障害だ、息子と別れてくれ……。彼女は泣く泣く受け入れ身を引くが、彼は振られたと誤解して激怒し、彼女を罵倒する。絶望し、孤独の死の床のヴィオレッタに、ようやく誤解に気づいたアルフレードがかけてつけるが、もう命の灯は残っていない……。

ヴィオレッタ中村恵理の全身全霊をなげうった哀切きわまりない絶唱に、会場は静まりかえり、すすり泣く。終演後は万雷の拍手。オペラはどんな悲劇でもカーテンコールで歓びを爆発できる。指揮者が呼び寄せられ舞台の中央に。しかしそこから離れた。歌手たちが客席を指さす。そして彼はそこから涙が止まらなくなった。聴衆が掲げていたのはウクライナ国旗だった。

ウクライナ人指揮者ユルケヴィチは胸のチーフに何回も触れながら、涙をぬぐった。ウクライナカラーのチーフ。来日直後に母国が侵攻された中、公演を成功に導いた。魂が引き裂かれる毎日、どんな思いで椿姫に向き合ったのだろう。気づくとオーケストラのコンサートマスターが立ち上がって熱烈に舞台に向かって拍手をしていた。ロシア生まれ、滞日約30年のニキティン。

泣いた。この一瞬に。希望に。いや無力さに。分からない。ただただ泣いた。

## 椿姫



## あすへの話題

小6で初めて眼鏡をかけたときの違和感はずごかった。視野の中の眼鏡の黒い縁が実に鬱陶しい。これからこんな枠付きの世界に生きるのかと思うと、嫌になった……。が、あら不思議。日がたつにつれて枠が気にならなくなっていった。目には見えていても、見えなくなることがあるのだ。全ては慣れの問題だ。そうやってぼくたちはおとなになっていく。いつしかそんなふうに思うようになっていった。

だけど慣れないことも大切だ。

亡き母のことを思い出した。孫の顔を見に来たとき、我が家の雑穀入りのご飯を出したら、ぜったい嫌だという。戦時中を思い出すというのだ。白いご飯だったのが、戦局の悪化につれ雑穀が増え、最後には雑穀ばかりのご飯になった。当時の嫌な思い出が呼び覚まされる。サイレンも嫌いだと言う。サイレンを聞くと、空襲警報のことを思い出す。夜中にサイレンが鳴り響き、防空壕に逃げ込んだ日々。

女手ひとつでバリバリ働き、大学生の息子を置いてニューヨークに移住するなど、母の人生は決断力と行動力に溢れ、合理性の人でもあった。でも雑穀入りのほうが健康にいいといくら言っても無駄だった。

この頃の日本人は何か物分かりがいいわねえ。全然怒らないわねえ。このとんがった母親はいつも憤っていた。眼鏡の枠が見えなくなるのはいいけれど、暗い戦争の時代にはめられた苦しく、悲しい枠は一生忘れない。それが彼女の人生を支えていた。違和感を消し去り、慣れることだけがおとなになることじゃない。眼鏡屋でレンズを入れ替えながら、人生を、世界を思った。

## 眼鏡



## あすへの話題

年度末で6年間務めた東京工業大リベラルアーツ研究教育院長を退任した。設立前の準備期間が2年あったから、8年間教育改革に携わってきたことになる。当初は「なんで理工系大学にリベラルアーツなの？」と言われてたが、「志を育む」をテーマに、入学直後に「東工大立志プロジェクト」を新入生全員が履修したり、3年生全員が5000字から1万字の「教養卒論」を執筆したりと、斬新なカリキュラムは大きな注目を集めた。少人数のグループワークやディスカッションも取り入れ、学生が積極的になり「明るくなった」と多くの人たちから言われる。読書量も激増した。文武両道ならぬ文理両道の今後が楽しみだ。

4月からは副学長に。文理共創戦略担当とちょっとしたものしいが、当初は「ワクワク担当」ではどうかと真剣に議論した。コロナの2年間で、得られた新たな可能性も多々あったけれど、心が縮こまってしまったところも大きい。だから大学の内外で、ワクワクを創りだしていきたい。名前はお堅いが、心はワクワク100%だ。

大学をハブにどんなワクワクが可能だろうか。科学技術と芸術の架橋、理工系の大学でトリエンナーレを開けないか。ジェンダー、マイノリティー……真に多様性にかれ、創造性に満ちた空間を学内外で創り出す。大学は世界の苦しみにいかに向かい合えるのか。将来世代にどんな未来を残すことができるのか。

これは大学内だけでは完結しません。これをお読みの方々、ぜひアイデアやお知恵やお力をお貸しください。ワクワクを一緒に！

ワクワク



## あすへの話題

「パパ、聖徳太子が『日本史』から消えたの知ってる？」。高校生の娘が言う。高校の科目の日本史のことだ。

小学校では聖徳太子という名前で習ったのに、高校の教科書では「厩戸王うまのりのおう（聖徳太子）」だ。違いは名前だけじゃない。「冠位十二階の制定」「憲法十七条の制定」「仏教興隆」「遣隋使の派遣」等々を一人でやり遂げた超スーパー聖徳太子は、厩戸王の名ではその政策チームのひとりになってしまった。

そもそも厩戸皇子が登場する「日本書紀」自体に、蘇我氏を乙巳いづしの変で滅ぼした中大兄皇子（天智天皇）の血筋を正当化する意図があり、藤原不比等（父は乙巳の変のフイクサー中臣鎌足だ）の編纂さんでは、当時の強大な権力者蘇我馬子の功績の多くを厩戸皇子に付け替え、厩戸皇子を聖人化したとされる。そして後世「聖徳太子」という名が与えられ、一大カリスマの太子信仰が盛り上がっていく。信仰対象としての聖徳太子と実際の厩戸皇子は別存在なのだ。

小学校と高校で違うのはおかしいという人もいるかもしれないが、それはそれでありなのかもしれない。「歴史は後世の人の意図によって創られたものだ」という大切な事実を学ぶことができるのだから。

そしてフィクションの聖徳太子を1万円のお札にしたのも、今から考えると含蓄が深い。原価20円ほどのお札がなんで1万円の価値を持つのか。それは誰もがそれを1万円だと信じているからだ。それを「信用」というけれど、信用だってフィクションで、そして聖徳太子の輝かしい「信用」は絶大、不滅なのである。

## 聖徳太子

## 宇宙人の感性



## あすへの話題

この人と出会わなかったら今の自分はいない。社会学者の見田宗介氏が亡くなった。浪人するはずがまぐれで大学に受かり、入学した理系で迷子になった。不安定な精神、ヤル気もなくなり、単位は軒並み赤点続き。早々に留年が決まった。自分を見つめ直そう。好きなことを見つけよう。全学部の学生が参加できる「全学ゼミ」を訪れた。行って見て驚いた。こんなへんな奴らがこの大学にはいるのか！ むちゃくちゃ濃い人間が集まっていた。

先生もだ。日本人離れた風貌。話し方も。外国人というより宇宙人的かも。着ている服がいつも同じ。カーキ色のジーパンと半袖シャツ。そしてゼミにいつも平気で1時間は遅れてくる。しかしゼミ生の混乱しまくりの自由発表をつまらなそうに聴きつつ、いったんコメントしだすと、軸が浮かびあがり、軸と軸が交差して立体的になり……こんなに頭のいい人がいるのだと驚嘆した。今この話をしながら、論点が無限遠の宇宙からやってくる。日常の次元がひっくり返り、隠された世界が顕れ出る。興奮した。目が開かれた。演劇ワークやダビング・メディテーションを取り入れたゼミ合宿、仲間と徹夜で熱く語り合った。

俊英社会学者として目覚ましいデビューを飾ったが、既成の学問の壁に直面し、インドやメキシコに飛び出し世界の多様性や奥深さを体感する。帰国して名著『気流の鳴る音』を出版した直後の、40代になったばかりの見田氏だった。偉大な社会学者の若き日の溢れ出る感性が、まだ子どもだったぼくたちの魂に火をつけた。その火はぼくの中でまだ赤々と燃えている。

## 先人たちの魂



## あすへの話題

「ピーターと狼」や「ロメオとジュリエット」で有名な作曲家プロコフィエフはどこの人か？ 帝政ロシアの領土であったとはいえ、生地は現在のウクライナ・ドネツク州だからウクライナ出身だったということとを最近知って、驚いた。現在のロシア生まれだとばかり思っていたのだ。

調べてみると、実はウクライナ出身だという音楽家は多い。ピアノストのウラディミール・ホロヴィッツもロシアからアメリカに渡ったとばかり思っていたけれど、生まれたのはキーウ近郊だ。ホロヴィッツとも共演の多かったヴァイオリンの巨匠ナタン・ミルシテインはオデッサ出身。完璧な演奏で「鋼鉄のタッチ」と呼ばれたピアノスト、エミール・ギレリスもオデッサだ。

ソ連を代表するヴァイオリンの2人の巨人、ダヴィッド・オイストラフとレオニード・コーガンもともにウクライナ出身だ。

ロシアの人々はこれらの巨匠たちを自国民として誇りに思っていたはずだ。だからウクライナを攻撃し滅ぼすことは自分たちの文化と伝統を攻撃していることでもあるのだ。ムソルグスキーの有名な「展覧会の絵」の終曲「キエフの大門」、この雄大に盛り上がる名曲を音楽家たちはこれからどのような心持ちで演奏するのだろうか。

もうひとり忘れてはならない音楽家は、ウクライナ移民の父母を持つ、指揮者・作曲家のレナード・バーンスタインだ。平和を希求し続けたバーンスタイン、そして一時代を画した巨匠たちはいま泉下で何を思うのか。伝統を取り戻すという口実のために、伝統を殺してはならない。それは先人たちの魂を殺し、自らも殺す行為なのだ。

## 傷つく意味



## あすへの話題

ひとはどんな言葉に傷つくのだろうか。

若い頃はやたらひとの言葉に傷ついていた。なんで自分の真意が伝わらないのだろう。誤解を受けるのだろう。悲しかった。

言論の世界に入って見方が変わった。40代前半、新聞で論壇時評を、書評を書き、テレビの書評番組の司会をして、これじゃダメだと思った。誰かの意見を紹介し、それを批評する。「すごいご活躍ですね」といろいろな人から言われたけれど、虚しさを感じた。安全な場所から誰かを論評するのではなく、自分が論評、批評される側にならなければいけない。そう思ったら、自分への批判も怖くなくなった。批判を恐れず思い切ったものを言い、批判されると「反響があったぜ!」と思えるようになった。

それでもひとは傷つく。大学の一大教育改革に着手し、学生のため、大学のためを一心に思い、日夜全身全霊で取り組んだ。しかし「既得権益が失われる」と、自分の都合しか考えていないような批判、糾弾も多々あった。情けなかった。悔しかった。ある日、教育担当の副学長と食事をしていて、思いが溢れ、2人同時に号泣した。いい歳をした男たちが居酒屋の2階で号泣している。人目なんか構っていられたなかった。でもそうやって、改革を志せば酷い言葉を投げかけられるのも当然、と心が据わった。昔に比べれば酷い言葉にも傷つかなくなったが、それでも傷つくことがある。

でも振り返ってみて気づいた。傷つくことは次なる成長へとつながっている。それが人生を深め、新たな世界を開いていく。歓迎まではしないけど、傷つく言葉に「よしこそ」くらいは言えるようになったかな。



## あすへの話題

昔の大学には「大教授」がたくさんいた。学識の深さは並大抵でなく、人間の器が大きく、小さなことにこだわらず、泰然としている。そんな大教授は減ったような気がする。自分が年長者になって同僚が「大」に見えないということかもしれないけれど。ただ学生から見て気になることがあった。メガネが汚れていることが多いのだ。

こんなに偉大な先生がなんで気づかないのか、それが不思議だったが、自分が歳を取ってみてわかった。視力が落ちて、汚れも見えなくなっているのだ。そっぴいわけか。

メガネの汚れが見えなくなった分、人生の深淵が見えるようになったのか……と違って、ふと気づいた。大教授たちは若い頃からメガネの汚れなど気にしてなかったのかもしれない。世事には関わらず、ある者は何百時間も本を読みふけて思案に没頭し、ある者は実験室に籠もり真理を探究する。若い頃から大物だったんじゃないか。

そうだ、教授たちの中には「大教授」に仕える助手や助教授から上がってきた人たちもいたけれど、その人達はあるより大教授風ではなかった。大教授の代わりに書類を書いたり、研究費の計算をしたりのお世話係タイプだった先生たち。

なるほど、今の大学に大教授がいないのは、研究費を獲得するための書類書きや、永遠に続く組織改革のための会議などの世事に誰もが精力を取られすぎているからかもしれない。常に神経が休まらず目先の仕事に追われて、巨大なテーマ、真理の探究に向かい合う余裕がない。メガネが汚れているので書類が書けませんとか、みんな言っていたらうなあ。

## 大教授





## あすへの話題

もの書きにとって第1作は人生の一大事だ。ぼくもそうだった。自分の本が出版されて本屋さんに並ぶ……。20代を学生として過ごし、社会に何の貢献もできなかった自分の本が出る。出版前は駅のホームの端を歩かなかった。ここで電車で轢かれてしまったら、ぼくは人生で何も生みださずに死んでしまう。今から振り返ると笑い話だが、ほんとうに真剣だった。

その本『覚醒のネットワーク』は仙台の小さな出版社から刊行された。みんな自分を縛っている殻から解放されて生き生きしようよ、そしてそんなぼくたちのネットワークが世界を変えていくんだ!という、若者のとんでもないポジティブさに溢れた本で、「読むだけで元気になる!」と評判になってたくさんの人たちに口コミで広がっていった。高校の同級生から「おまえ、警察関係の本を書いたんだってな」と言われ、何のことかと思ったら、『覚醒剤のネットワーク』だと誤解されていたけど。

33年前、ぼくを見いだしてくれた仙台の加藤哲夫さんが亡くなってカタツムリ社も消滅し、その後講談社、河出書房新社で文庫になり、そして先ごろまた単行本として復刊となった。4つもの違う出版社から刊行され、30年以上も読み継がれるなんて、31歳のぼくには想像もつかなかった。

復刊したいという若い編集者の目は真剣だった。「この本を元気を失っている人たちにも届けてあげたいんです!」。そう、あの時ホームの端を歩かなかったのも、この本を君に、あなたに届けて!という熱い思いからだ。30年後にも思いは伝わる。泣きそっだ。

## 本を出す